

演題 4. 紙片唾液検査法による1998年度心身症外来患者測定データの分布と口腔生理学の視点からのアドバイスについての考察

○佐藤 匡, 三上 一治*, 北田 泰之

岩手医科大学歯学部口腔生理学講座, 岩手医科大学医学部内科学第三講座*

1998年度心身症外来受診者で、主訴に口渇などの口腔関連項目が含まれている33名について唾液検査と口腔生理学の観点からのアドバイスを行った。その概要について報告する。

測定対象は、本測定に同意した女性27名、男性6名の合計33名で、年齢は 48.6 ± 17.0 歳であった。この内、女性10名については初回と約半年後の測定値のt検定による比較が可能であった。測定に必要な安静時混合唾液約100 μ lの採取は、小紙片を舌背・口蓋間、次いで舌下部に2分毎に移動しながら行い、その間の時間を0.5分単位で計測した。唾液のpH、CO₂の逃散に伴って生ずるpHの初期変化量や電解質濃度の他、血圧と口腔温などの測定項目についてデータを採取した。

結果：1) 対象者は口渇や異味覚が主訴に含まれている心身症、過換気症候群、自律神経失調症、などの外来受診者であった。2) 初回測定時の唾液採取時間は 2.8 ± 1.1 分であったが、半年後には 1.5 ± 0.7 分と有意に短縮した($P < 0.01$)。3) 唾液のK⁺濃度が半年間で30.8mMから20.9mMに低下した($P < 0.05$)。4) 受診者への主なアドバイスは、咀嚼数の増加、食事内容の改善、歯科受診の進言、などであった。

考察：測定対象者の半年後の測定値には唾液採取時間の短縮とK⁺濃度の低下が認められたが、これらは安静時における唾液分泌速度の有意な上昇を示唆している。しかし、唾液採取時間は正常群より若干遅延したレベルに留まっており、継続的な測定が必要と思われる。また、唾液分泌に亜鉛を活性中心に持つ炭酸脱水素酵素が関わっていることが近年注目されているが、この酵素の活性とpH初期変化量との関連を念頭に置いたアドバイスが唾液分泌状況の改善に少なからず貢献していると思われる。

演題 5. 上顎中切歯歯冠の萌出量ならびに臨床的歯頸線における研究—加齢的变化—

○駿河由利子, 野坂久美子, 甘利 英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

最近小児の外傷による上顎中切歯歯冠破折に伴って、全部冠装着の機会が多くなってきた。しかし、小児の場合、永久歯外傷の好発年齢は7~8歳と若年であり、歯の萌出は不完全であるため、修復は暫間的なものにとどまっている。従って、永久修復を行うにあたり、萌出後、歯頸線の安定する時期を知ることは非常に重要である。そこで、今回は、上顎中切歯萌出開始(6~8歳)から永久歯列完成(23~25歳)までに至った同一個体23組の石膏模型を用いて、臨床的歯頸線の安定する時期について検討した。

研究方法は、これらの模型を歴齢と萌出状態から20歳の萌出量を100%として、9段階に分類し、近心隅角部、近心部、中央部、遠心部、遠心隅角部の5つの部位について、レーザー変位計を用い、唇側ならびに舌側の形態を測定した。測定の際、基準平面には、構成咬合器を用いて上顎模型の基底面に印記した下顎の咬合平面を用い、唇舌側別々に測定した形態をこの平面にて合体させた。さらに、6~8歳の歯冠唇面中央3分の1の領域を基準として、同一個人の描画を重ね合せ、舌側においては、唇側と切端からの同距離に基準点を設定した。測定距離は、唇面の歯頸点と切縁を結んだ直線の歯冠長、基準点からこの直線に垂線を降ろした点を境にした、切縁側の距離ならびに歯肉側の距離である。また、舌側では基準点から歯肉側までの距離について測定を行った。

その結果、唇側切縁側の変化は、遠心隅角部を除いた部位で、加齢的に23~25歳まで0.1~0.2mm減少した。また、歯冠長の変化は、歯肉側の変化に大きく影響を受け、唇側歯肉側の距離は15~16歳まで増加を示し、一旦安定するが、23歳以上でわずかながらさらに増加する傾向が認められた。一方、舌側歯肉側の距離は、15~16歳まで増加した後、遠心ならびに遠心隅角部では緩徐な増加を示していた。従って、永久的な歯冠修復の時期は、これらの推移を考慮して決定すべきと思われる。